

万葉集に見える難波の研究 : 表現視座の諸相

著者	小田 芳寿
内容記述	学位記番号 : 論言第20号, 指導教員 : 村田 右富実
URL	http://doi.org/10.24729/00002531

〈論文要約〉

万葉集に見える難波の研究―表現視座の諸相―

大阪府立大学大学院 人間社会学研究科

言語文化学専攻 日本言語文化学分野

小田 芳寿

本論文では、歌表現によってどのような空間がつくり出されているのか、そしてその空間をどのような視座から把握していたのか、という方法に基づき、「大和と難波を往還する際の歌の考察（第一章）」、「難波行幸の際の難波の空間把握と表現視座の考察（第二章）」、「難波と畿外を往還する際の歌の考察（第三章）」と、遠心的な章立てにして難波という空間のはたらきを考えた。以下、各章の概略を記す。

第一章では、大和と難波を往還する際の歌（9・一七四七〜一七五二）の分析を中心に、都人が龍田山を越える（大和から難波、難波から大和に向かう）時に、その龍田山をどのような視座から捉えていたのか、ということ考察した。

第一章第一節では、難波下向の際の歌（9・一七四七〜一七四八―以下A群、一七四九〜一七五〇―以下B群）の分析を、A、B群の長歌にそれぞれ見られる龍田山の桜の様相を両群共に「散り過ぎにけり」と歌うありようから行った。A群（大和側）の場合、白雲松並嶺籠樹山描概括嶋点把握し、そこから小

した結果、「風し止まねば」や「春雨 継ぎてし降れば」という確定条件句を経て、桜の現状に気付くというものであり、視座が固定されていたといえよう。そのうえで「散り過ぎにけり」を契機として、現状の桜の維持を強く要求するという、いわば桜が散ってしまうことへの懸念を歌った歌がA群であった。

一方、B群（難波側）の場合、龍田山を越え、難波側に移動したことによって桜の現状に気付くのであり、視座が移動していたといえよう。その視座の移動を表しているのが「夕暮れにうち越え行けば」という確定条件句であった。そして、その確定条

件句を経て、「散り過ぎにけり」を契機として難波側から見た桜の様相が歌われる。難波側から見た桜の描写は、つぼみの状態である桜に対してこれから変化することを期待するとともに、A群で抱いた懸念が杞憂に終わり、「君」への称讃にふさわしい桜の景を確認するというものであった。A、B群では、龍田山越えを介在させることで、桜の様相を捉える視座が異なっていた（A群―大和側、B群―難波側）といえよう。

第一章第二節では、大和還来の際の歌（9・一七五一―一七五二―以下C群）を、前節で考察したA、B群の歌の理解を踏まえて検討した。C群長歌は、散ってしまう桜への懸念（A群）から、その懸念が杞憂に終わった（B群）ことを受けて、一日経っただけの桜の状況を歌うものであった。その桜は、散り落ちて流れる様相を示していた。それゆえに桜の落花に対する焦燥感が起こり、さらにその焦燥感が高まった結果、祭りを行うことを強く切望することが歌われるのである。そして、その祈願は「君」への配慮へと収斂していくのであった。

そして、C群反歌では、それまでの「君」に桜を見せたいがために、桜の落花に対する焦燥感が高まっていく状況を歌う歌から、一転して坂の麓で、咲きををる桜を共に愛でる児を求めるといふ、「児」への思慕を歌い歌群は閉じられる。このような性質を持つC群長反歌は、万葉第三期以降の旅を歌う長反歌にしばしば見られることであり、長反歌の一つの形式として許容されていたと考えた。

第二章では、万葉集中の難波行幸歌の考察に重点を置き、難波行幸の際に、どのような空間がつくり出されていたのか、ということを考えた。

第二章第一節では、難波行幸歌に歌われる女性像を、できるだけ他の行幸歌に歌われる女性像の歌の中に相対的に定位させつつ分析した。その結果、見えてきたことは、特定の女性への恋歌は難波行幸歌を彩る一つの特徴であり、行幸における恋歌は難波行幸にこそふさわしいということであった。こうした歌々が難波行幸に傾くことについては、難波という空間に起因すると考えた。

第二章第二節では、笠金村の神亀二年難波行幸歌の性質を検討した。金村歌長歌では、歌表現上に「大君」、「天皇」が現出し

ない。その「大君」、「天皇」が存在しない難波の空間は王威が発動されることはなく、都における日常とは異なる世界であった。そうした空間描写が、長歌結句で「旅にはあれども」と逆接の形式で旅を自覚するという極めて異質な手法を生起せしめたといえる。

そして、第一反歌では、それまで歌表現上に立ちあらわれなかった大君が現出し、その大君の具体的統治という王威の発動を示す表現によって、都という存在が顕現したと把握できる。こうした第一反歌を経由してこそ、第二反歌では、難波独自の自然の海の音（海人娘子が関連する梶の音など）を歌う点において、王威に包摂される都の理想の情景が歌われ、大君と難波の都が讃えられていたと解することができよう。神亀二年の笠金村の難波行幸歌の考察から、その時代に即した難波への視座があり、それがその時の難波行幸従駕歌の讃美の方法を喚起させたということが明らかになった。

第二章第三節では前節で考えた笠金村歌の理解を踏まえ、笠金村、車持千年、山部赤人の神亀二年難波行幸歌群の性質を分析した。順に歌群を読んでいけば、金村歌は、難波の現状を歌う長歌、そして王威の発動によって都の完成を歌う第一反歌、難波独自の自然の海の音が歌われ、王威に包摂される都の理想の情景をあらわす第二反歌という理解ができる。次に千年歌は、長反歌とともに難波宮に行幸した官人達の周遊地（女性との邂逅がある場所）として「住吉」という空間を讃えた歌と捉えられよう。そして、赤人歌長反歌は、難波宮から淡路周辺まで天皇の世界の広がりやを歌う歌といつてよい。このように難波独自の自然の海を描写し、都を讃えるところに難波行幸従駕歌の讃美の方法を看取でき、難波への視座を確認できた。

第二章第四節では、天平六年の難波宮行幸歌群を歌表現に即して分析した。天平六年難波宮行幸歌群には、難波の海辺の景にあわせて、行幸における様々な女性像が歌われるという共通項が存在していた。難波の海辺の景は、大和人にとって新鮮であり、めずらしい景観であったろう。そうした景には讃美性が付与されるものもあるが、当該歌群の場合、景への讃美性はなく、土地の女性、女官等、女性へと向かう強い心のありようを読み取ることができた。天平六年難波宮行幸歌群では、女性像という基準が歌群の配列を導く装置として機能していると考えた。

第三章では、都人が難波から畿外へ下る時に、それをどのような視座から捉えていたのかを難波と畿外との往還の際の歌の分

析から考えた。

第三章第一節では、天平四年の西海道節度使を見送る歌の考察を行った。長歌では、集中の送別歌の中でも西海道節度使としての職務内容を積極的に描く点に特色があり、それは歌の対象である宇合への称賛に収斂していた。また、その表現は、当時の法令を反映しつつ職務に専念する節度使宇合の姿を浮き彫りにするものであった。それを受けて反歌では、万が一の状況を仮定し、そのような場合でも任務を全うできる宇合像が誇張的に歌われる。そこにも、「敵まもる」宇合への讃仰を看取することができた。

第三章第二節は、天平八年の遣新羅使人贈答歌群を編集という視座を持ち込まずに、あるままの情報に即して歌を検討することを試みた。その結果、一首目から九首目までの歌は別れの前の歌であり、それぞれの贈答において男女が同じ場を共有していること、そしてそこには別離の不可避から高揚する切迫感という心理状態の展開を読み取ることができた。さらにその後には位置する十首目、十一首目の歌二首で男女二人の離別後の離れ離れの心情表出を歌うことによつて、別れた後の世界が描き出され、男女の距離の懸隔が諒解できた。

第三章第三節では、天平四年の遣唐使を見送る歌である、好去好来歌の性質の把握を行った。長歌では、皇統の正統性を担い神格化された聖武天皇の威光に包摂されることによつて、安寧たる渡唐が保証されるはずであるにもかかわらず、普遍的な神に祈り、神の威光に縋っていくありようを歌うところに特色があった。それを受けて反歌では、帰着地での待つ行為から帰還の瞬間が歌われる。かかる長反歌は、遣唐使歌の中でも極めて異質な作品であった。そして、こうした異質な歌は、渡唐体験のある憶良だからこそ歌うことが可能であったと考えた。

以上、本論文では、歌を一首ずつ精緻に読み解くという視点と、難波の空間把握を行うという視点とをあわせ、難波への視座の諸相を検討して難波という空間のはたらきを明確にすることを目的としてきた。難波という空間は、大和にはない、海、海人、宮が存在する所であり、しかもそこには一日の往還が可能であった。大和から見て難波という国は、身近にある異世界であった。